伊東市史だより

第12号
平成24年3月30日

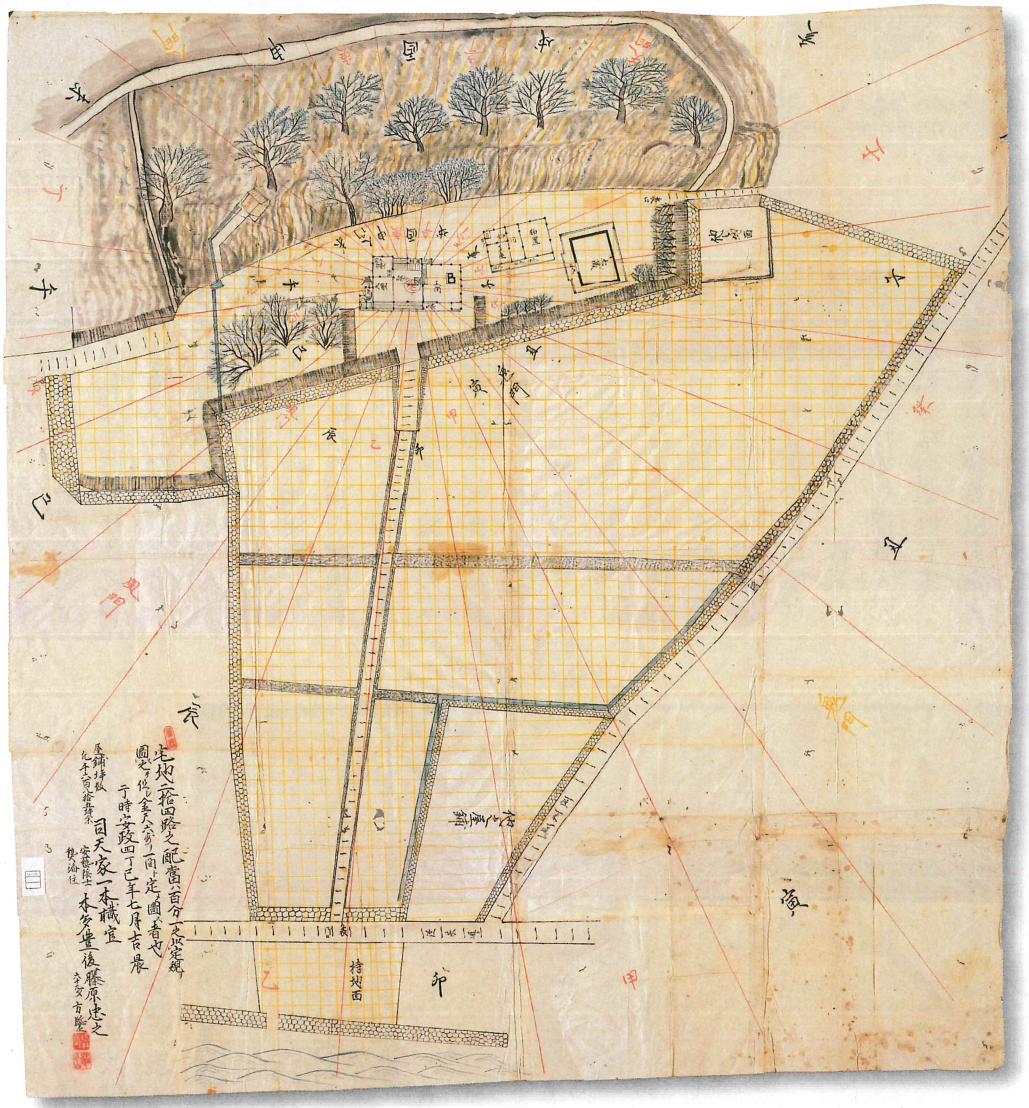

図1　安政四年（1857）宇佐美荻野家方位絵図
屋敷の絵図に鬼門などの吉凶を占う方位が書き込まれている。宇佐美の名主荻野家の屋敷のようすや信心深い姿がわかる貴重な史料である（荻野家文書）

【特集】江戸時代の伊東 その二

『伊東市史　史料編　近世Ⅱ』が刊行されました（図2）。一昨年度刊行された『伊東市史　史料編　近世Ⅰ』と合わせて二冊で、伊東市域の江戸時代に関する基本史料を収載しました。

前巻の『伊東市史　史料編　近世Ⅰ』では、近世伊東地域の支配・政治、産業・経済など、いわば社会の骨格というべき問題を扱いましたが、それに対して、今回の『近世Ⅱ』では、村社会の人間関係や事件・世相、紀行文や地誌にみる文化、村内の寺社・信仰、そして幕末の伊東地域の動向など、いわば社会の血や肉にあたる史料を、第八章から第十三章までの全六章に分けて編さん収録しました。

第八章「村人の由緒と身分」、第九章「村の民俗世界」、第十章「村の世相と災い」は関口博巨、第十一章「文化」は加

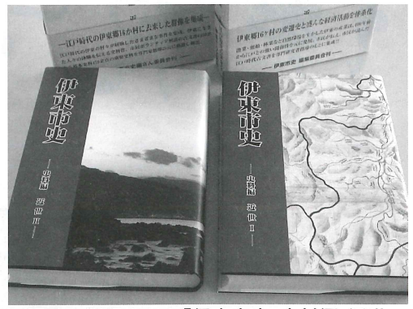

図２　刊行された『伊東市史　史料編　近世Ⅱ』（左）と前年度刊行の『同　史料編　近世Ⅰ』

藤清志、第十二章「村の寺社と信仰」は北村行遠・安藤昌就・金子浩之、そして第十三章「幕末の動向」は関口が、それぞれの編集と解説文執筆を担当しました。以下、担当者ごとにそれぞれの章の概要やトピックなどを紹介してまいります。

編集・執筆担当の
関口博巨先生（神奈川大学講師　写真右）と
加藤清志先生（伊東市文化財審議委員長　写真左）

歴史のなかの村と「家」

江戸時代の伊東地域の人々にとって、村や「家」あるいは近所や親類は、生活や生命を保障してくれる最後の砦でした。それだけに村社会においては、そうした結び付きやつきあいを律義に守らなくてはならないという観念、いわば〝村と「家」の価値観〟が育まれていたのです。世代を超えて連続する社会的まとまりである「家」を、建物の家と区別するために、ここではカギ括弧をつけて表記しています。

百姓の「家」は、家名・財産・家業・身分のほか、村・地域における権利・義務関係なども取りまとめて一式としたもので、古文書のなかではしばしば「跡式」や「株式」などと表現されて、相続・売買の対象にもなっています。この「家」は、家長はもとより家族全員によって、ときには近所・親類や村によって支えられていました。

守るべき「家」の絆は、お墓参りをして先祖代々の霊を供養し、由緒書や系図を作成することで確かめられていきます。たとえば、幸手屋の屋号を名乗り、「五十集」渡世（魚商）などの商業活動を展開した和田村の浜野家は、「古今雑記二」と題した由緒書を作り、宇佐美村の荻野家は、「家」の由緒と子孫繁栄の心得を記した家訓を伝えています。いずれも当時の「家」意識を伝える良質な史料です。

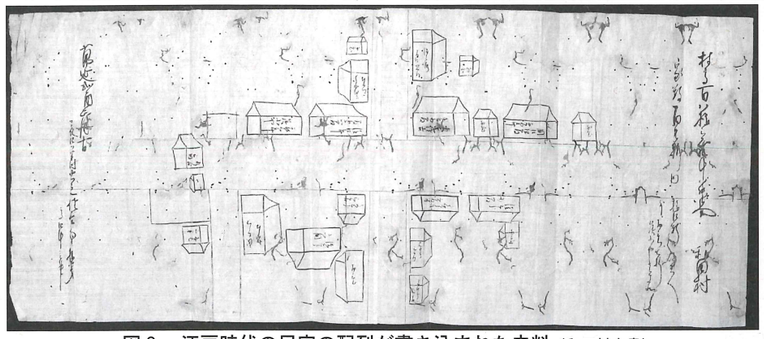

図３　江戸時代の民家の配列が書き込まれた史料（和田村文書）

元禄大津波と「家」

元禄十六年（一七〇三）十一月二十二日の大地震と大津波は、伊東地域にも甚大な被害をもたらしました。宇佐美村の六郎左衛門（荻野家・屋号遠州屋）の家族は、この大津波で不幸にも全員溺死しています。しかし、六郎左衛門を家名に掲げる「家」自体は、村や親類のテコ入れによって、親類筋から相続人が抜擢され数年で再興されています。

この事例からは、当時の伊東地域の「家」が、村や親類の強い意志によって守られていたことが窺えると思います。「家」と村のほか、親類や近所もまた、きわめて密接な相互保障関係を築いていました。

それぞれ単独では存在しえなかったのです。

村の民俗世界

江戸時代の伊東地域には、村や「家」以外にも、人々の絆を深める要素がいくつもありました。それは民間の風俗的・習慣的なさまざまな「つきあい」です。『史料編　近世Ⅱ』では、それらをひっくるめて「民俗世界」と表現しています。この民俗世界は、領主に把握された村や「家」とは異なる次元での人々の結びつきでした。

たとえば和田村の名主だった下田家は、婚礼・元服・帯解きなどの祝儀、葬式・法事、あるいは盆・暮れ・年始などの年中行事に際して、村の範囲や身分・階層を越えて、贈答をともなう挨拶を交わしていました。

また、鎌田村の庚申堂や宇佐美村の村堂をはじめ、伊東地域にはお堂やお宮などの小さな聖地が点在していました。これらは、村内のより小さな地縁集団や血縁集団、年齢集団などによって創建され、保守・管理されたもので、小集団を結束させる精神的なより所となっていたのです。

そのほか、商人の「えびす講」、下田・川村・徳永三家の「結義講」、三島宿を中心に広域的に募集された「長久講」、曹洞宗最勝院（現伊豆市）の復興のために集った「七十二人講」のほか、地域の相互扶助金融を目的とした「無尽講」「頼母子講」など、多種多様な結衆がつくられていました。地縁・血縁・職業・信仰などを媒介とするこれらの講組織が、さまざまな次元で人々を結び付け、地域の絆をよりいっそう強固にしたことは間違いありません。

近世の村に「若者中」「若衆中」などと呼ばれる年齢集団が存在していたことも、一般的によく知られていることです。いわゆる若者組です。たとえば、八幡野・湯川・和田の若者組は、それぞれ独自の規律をもち、財政を管理・運用していました。海に潜って沈没物を引き上げるなど、村の力仕事はもっぱら彼らの役割であったようです。また、宇佐美村留田の若者組は、狂言（村芝居）興行を大々的に催し、船の造り替えやお宮の建て替えも行っていました。

以上のような民俗世界の存在が、先に述べたように、領主に把握された村や「家」とは別の次元で、地域社会における人と人との絆を深めていたことは確かでしょう。しかしながら、若者たちが好んで催した狂言や神楽などの興行は、華美な人集めとして、幕府や領主から目の敵にされ、たびたび厳しい規制の対象となりました。そのため、領主支配との折り合いをつけて村の気風を守ろうとする村役人たちと、新しい世界を求める血気盛んな若者たちとは、ときに激しく対立することもあったのです。

「飛び上がりの心」

江戸時代の伊東地域は、孤立した小宇宙だったわけではありません。徳川将軍のお膝元である江戸の消費を支える海山の産物の生産地として、多様な湯治客を迎え入れる観光地として、多くの人々が出入りし、伊東地域の人々と外界との接触は絶えることがありませんでした。そのような日々の暮らしのなかで、村や「家」を窮屈に感じた村人も少なくなかったようです。

その例として、ある陰陽師が寛政年間に引き起こした、当地域と領主を巻き込んだ興味深い事件を紹介しましょう。

寛政三年（一七九一）夏のこと、竹内長門と名乗る江戸の陰陽師が松原村へやってきました。彼は自らを「土御門家関東大目附職」と称して、伊東地域で占いや祈祷をして見料をとっていました。そればかりか、占いをしていた近隣の寺院を指弾して金銭を要求し、医師・座頭のほか百姓の

子弟を占いの門弟にとり始めたのです。

寛政三年の夏に竹内長門が騒動をおこしたきっかけは、「陰陽道職業いたし候輩は、土御門家支配たるべき儀、もちろんに候」という同年四月の幕府のお触れでした。ただ、長門が名乗った「土御門家関東大目附職」という肩書は僭称（せんしょう）であり、彼は幕府のお触れを利用して、伊豆国の祈祷系宗教者の支配を企てたのでした。領主である石見浜田藩の対応は遅く、同年暮れになって、ようやく長門を領内から追放しています。

私たちは、この事件の史料からいろいろなことを読み取ることができます。たとえば、十八世紀末の伊東地域の人々が、さまざまな旅人と触れ合い、大いに刺激を受けていたこと。村での暮らしに飽き足らず、新しい世界を求める若者たちがいたこと。そして、村人に律義と勤勉を求めていた村役人たちは、そうした若者たちの心理を「飛び上りの心」と表現して警戒していたことなど。

村役人たちは、村の秩序に従わないこうした行動を「気髄気儘」と呼び、謹慎や追放などの処分を下す場合もありました。

幕末の動向

文化・文政期以降、伊東地域に伝えられる異国船関連の法令や命令は、顕著に増加します。とくに、江戸幕府が異国船打払令を撤回した天保十三年（一八四二）二月以降、日本近海に出没する異国船は

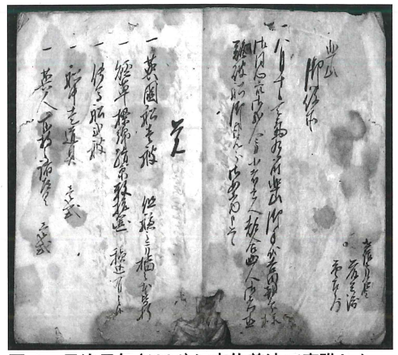

図4　元治元年(1864)に宇佐美沖で座礁したイギリス船の始末を記した文書（杉山文書）

激増し、江戸城下と関東・伊豆沿岸の防備を固めることは、幕府にとって急務となっていました。幕府の海防役人の視察にあたっては、当地域の村々は宿泊所や休息所を提供させられたほか、金銭的負担も負わされました。

さらに嘉永六年（一八五三）六月には、アメリカ東インド艦隊司令長官ペリーが相州浦賀に来航し、安政五年（一八五八）六月には、いわゆる安政の五か国条約が締結されます。開港によって世界の自由貿易市場に組み込まれた結果、伊東地域の人々が異国人と出会う機会も生じました。たとえば元治元年（一八六四）八月、宇佐美村留田の下磯にイギリス商船が難破漂着し、宇佐美村の人々は「夷人」たちに宿や食事を提供するなど、親しく接しています。

異国船来航によって、幕府および日本の対外政策は大きく動き出し、当地域の村も人も、その変動の渦中に否応なく巻き込まれていったのです。同じころ、安政の大地震、大川の高水（洪水）、凶作などの自然災害、さらに数度にわたる大火が、当地域を襲っています。当地域に暮らした人々は、閉塞感とともに時代の曲がり角を強く意識したに違いありません。

そうした状況下にあった文久二年（一八六二）、和田村の下田米作は領主の本多対馬に農兵献策書を提出しています。

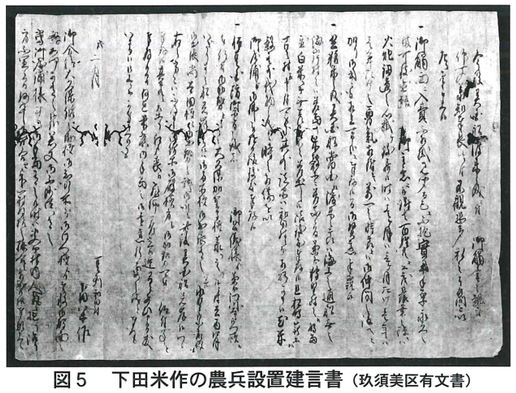

図5　下田米作の農兵設置建言書（玖須美区有文書）

農兵編成案を具体的に提言したもので、武士による軍事力の独占に変更を迫る画期的なものでした。百姓身分であった米作からこうした献策がなされたことの意義はきわめて大きいというべきでしょう。村と「家」の論理に対抗する「飛上りの心」や「気髄気儘」は、いまや村も地域も身分も越えて、確固とした精神と思想の世界へ踏み出す準備を整えたのです。

慶応三年（一八六七）十月、徳川慶喜が大政奉還を奏上し、翌明治元年（一八六八）正月三日に王政復古の大号令が出されます。明治維新です。

ところが明治四年三月、菊間藩は、荻村百姓にたいして、武士に対する無礼を禁じる身分礼節遵守令を出しています。なんと鈍感で反動的な動きでしょう。旧支配層のあがきが如実に示されています。

それでも維新の変革は進み、国家体制も地方制度も身分秩序も、留まることなく変わっていきます。伊東地域の人々は、この社会全体の激動のなか、新しい時代に向かって歩を進めていたのです。

（関口博巨）

江戸時代の伊東の文化

政治や経済などの文書に比べて、地方の文化にかかわる文書は残りにくいものです。文芸作品や絵画なども、個人が作成し、所持したものは、その人限りで、その作品が子子孫孫に伝わるということは少ないようです。

それでも、江戸時代も後期になると、地元の人たちの文化活動の姿を伝える品が、少しずつは残っています。

『伊東誌』を全文復刻

そういう中で、最も大きな存在は、浜野建雄の『伊東誌』です。江戸時代後期の伊東七か村のさまざまな分野にわたって、いわば伊東の百科事典ともいえる地誌です。嘉永七年（一八五四）頃に完成したと見られますが、原本はすでに失われ、最も忠実な写本と見られる「鳴戸本」を、全文現代活字で収録しました。現代文に書き直して読みやすくして欲しいという要望もありますが、そのためには研究グループを組織して、数年がかりで取り組む態勢が必要と思われます。それは今後の課題として、今回は基礎史料として、なるべく忠実な復刻に努めました。

図6　浜野建雄肖像（浜野家所蔵）

地元作家たちの歌集『山家塵』

もうひとつの伊東の文化の流れとしては、江戸時代後期に修善寺熊坂の竹村茂雄につながる国学（特に和歌）と、小田原俳壇につながる俳諧の世界とがあげられます。両方に属す例も多いようです。

当時の文人仲間の一人であった妙昭寺の僧「是真」が、妙昭寺に残した遺品の中に残っていたのが『山家塵』と題した歌集です。歌集の最後に、歌を載せた作者の名前（本名と雅号）の一覧があります。総勢五十二名、千百三十一首の歌が記されています。

交流のあった他国の作者（例えば本居宣長の養子大平や平田篤胤など）の名もありますが、大半は地元の作者でした。大きく分けて、新井・和田などのグループと、八幡野のグループとあります。それぞれのグループが毎月例会を開くと共に、合同の例会もあるようで、交流の様子がうかがわれる歌もあります。例会の兼題や言葉書きからも、彼らの優雅な生活ぶりがうかがえます。

「九月十三夜も、妙昭寺において月見むと、人々つどいて、夜もすがら酒飲みて歌詠みける、座中の吟」として八首あ

俳句の世界

伊東の俳壇の中心的存在であったと考えられる夜琴亭松十の死後、門人たちが師を追慕して追善の句集『いさりの俤』を出したといいますが、この句集を入手することが出来なかったのは、残念です。

俳句の世界では、残念ながら歌集『山家塵』に匹敵するような、江戸時代の句集を見つけることはできません。

川奈の三嶋神社に残る奉納額などから神社に奉納された額の形で残っていた俳句の作品の幾つかを史料集に入れました。墓碑・石碑などに残る俳句関連史料も収録しました。

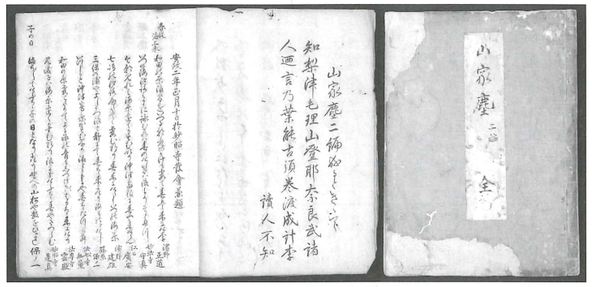

図7　歌集『山家塵』

紀行文で見る江戸時代の伊東

伊東を通過または伊東に滞在した人たちが残した記録も、江戸時代の伊東を知る貴重な史料です。

その中で、現代の出版物で読むことの困難な作品で、確かな原本を入手できた幾つかを収録しました。

安積信（艮齋）の『**遊豆紀勝**』や、海若子の『**伊豆日記**』は、江戸時代に何回も刊行された有名な本ですが、現代活字の出版物がないので、伊東の関係部分を抄出しました。

吉田松陰の『**回顧録**』も、伊東を通る部分を載せました。

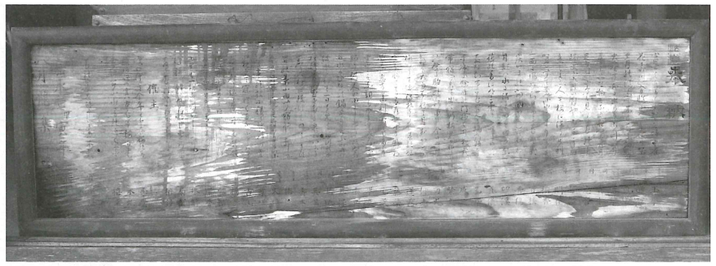

図8　川奈 三嶋神社の奉納額には伊豆各地にいた俳人の作品が残されていました（三嶋神社蔵　嘉永七年在銘）

吉田松陰が、憂国の志を抱いて下田へ向った時は、熱海から伊東を経て東海岸の下田街道を駆け抜けたのですが、それを知らないで、松陰は天城峠を越えて下田へ行ったと思っている人が多いようです。萩市の松陰神社から松陰自筆本の写しを取り寄せて、写真と現代活字文とを載せました。「伊東に至り午食す（伊東に至って昼飯を食べた）」と、書いてあります。

伊能忠敬の**測量日記**や、有名な富士講行者**小谷三志**の**旅行記**なども、原本から翻字して活字にしました。

他にも内容的に興味深い紀行文がありますが、原本を確認できないものは収録を差し控えました。　（加藤清志）

江戸時代伊東の寺社と信仰

江戸時代の伊東市域には約四〇か寺ほどのお寺とほぼ同数の神社が所在しています。

これらのお寺や神社は、江戸時代の初め頃までには現在の姿を整えて、大体どの村にも一か所以上のお寺と神社が保持されています。江戸時代の初期までに開かれたお寺を「古跡」などと呼んで、古い歴史があることが寺々の「由緒書」などにまとめられています。各地からの参詣客は、こうした由緒を訪ねて寺社に参詣し、合わせて伊東温泉で湯治をしたようです。史料編にはできるだけ多くの寺の由緒書を掲載しましたので、市民のみなさん各家の菩提寺の来歴を御確認いただけるものと思います。

そうした由緒書のなかで特に注目される内容が書かれていたのは、玖須美の佛現寺と新井の弘誓寺でした。

図9　養珠院お万の方の逆修位牌（佛現寺蔵）

弘誓寺は、市内の寺院のなかで唯一幕府から寺領を認められた寺で、徳川家や松平家との特別な関係があったことが記され、江戸城の三の丸まで駕籠に乗って登城することを許可されています。

佛現寺は、日蓮聖人が三年におよぶ流罪生活をされた場所として有名ですが、徳川家康の側室で紀州徳川家と水戸徳川家藩祖の生母となった養珠院お万の方が慶安三年（一六五〇）に、この寺を参詣されたことが記されていました。この参詣の際に納められたお万の方の法名を記した位牌が現在も佛現寺に保管されています（図9）。養珠院お万の方は日蓮聖人への篤い信仰心をもち、聖人ゆかりの地を参詣して、各地で寄進行為と供養をしています。伊東に、お万の方の足跡が確認されたのは大きな成果でした。

江戸時代の神道は、京都の吉田神道からの許可を得た神主が行うことが幕府の方針でした。伊東市域には宇佐美の北山家、八幡野の肥田家などで吉田神道を学んだ神道家がいたことが確認できます。

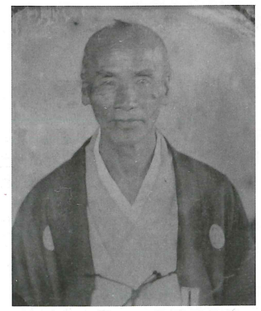

図10　肥田春安の肖像写真（江川文庫蔵）

図10の人物は八幡野の八幡宮来宮神社の神主で、江川家の侍医でもあった肥田春安です。江川家所蔵の写真で幕末のものとみられます。

寺社にはいろいろな民間信仰も行われますが、図11・12の絵馬は、宇佐美の朝善寺に奉納されたものです。この寺の開山日朝上人は宇佐美出身で、身延山久遠寺十一世となって日蓮宗中興の祖と呼ばれる人物です。日朝上人は晩年に眼を患いながらも活躍を続けたので眼病守護の上人と慕われ、信仰を集めた寺です。

紹介した寺社以外にも歴史と由緒をもつ寺社が数多くあります。史料編には解説文が付けられていますので、参照しながら伊東の歴史を知る基本史料として御活用いただければ幸いです。　（金子浩之）

図11・12　眼病治癒を願う絵馬（宇佐美 朝善寺蔵）

伊東市史編さん事業 刊行書一覧 ―好評頒布中―

●伊東市史

『伊東市史　史料編　古代・中世』（B5版 縦組 858頁・口絵カラー図版55点　定価：5,000円）
伊東・宇佐美を名字の地として活躍した武士団伊東氏と宇佐美氏の残した史料を全国的視野で集成！

『伊東市史　史料編　近世Ⅰ』（B5版 縦組 785頁・口絵カラー図版6点　定価：5,000円）
江戸との強い経済的なつながりを示す伊東の古文書544点を精選して活字化！

『伊東市史　史料編　近世Ⅱ』最新刊！（B5版 縦組 772頁・口絵カラー図版18点　定価：5,000円）
伊東市域16カ村の村社会、往き来する旅人の姿や幕末の伊東を捉える文書群を精選して活字化！

『図説 伊東の歴史』（オールカラー・A4版 縦組 260頁　定価：2,000円）残部僅少
複雑多岐な伊東の歴史を原始から現代まで鮮明な写真と図表で再現し、わかりやすく解説！

●伊東市史調査報告　各2,000円

第１集　『伊東市の棟札』　寺社に秘蔵される棟札の市内悉皆調査記録。宗教史・職人史料の宝庫。
第２集　『伊東市の石造文化財』　中世石塔・近世墓石・路傍の石仏の悉皆調査。近世墓石の増減グラフに注目！
第３集　『伊東市の民俗』　初めて行われた伊東市の民俗総合調査記録。

●伊東市史研究『伊東の今・昔』　各1,000円

創刊号　講演録「海からみた伊東」　網野善彦
品切れ　「火山がつくった伊東の大地と自然」　小山真人
「伊東氏由緒の形成」　盛本昌広
「江戸時代伊豆東海岸の交通」　加藤清志
「子供の守護神としての伊豆の道祖神」　木村　博
「古文書と私」　星野和子

第２号　講演録「伊東一族の五百年」　山田邦明
品切れ　「伊東市川奈姥子窟の考古学的調査」　坂詰秀一・上野恵司・金子浩之
「成長儀礼の歴史と民俗」　吉川祐子
「関東大震災に宇佐美の児童はいかに対応したか」　笹本正治
「津波歴史データ集積の重要性」　今村文彦

第３号　講演録「伊東の歴史と文化をどう生かすか」　笹本正治
「伊東と『曽我物語』」　坂井孝一
「元禄地震における伊東での被害と人々の行動」　西山昭仁
「伊東の近代建築とその背景」　建部恭宣
「海の村を建設する―戦時期『海の村』の分析―」　小川徹太郎

第４号　講演録「考古学からみた伊東の歴史」　坂詰秀一
「戦国時代の伊東」　盛本昌広
「近世伊豆国伊東地域における山林利用について」　田上　繁
「近代漁業税の形成とその賦課動向」　佐々木哲也
「鎌田城跡発掘調査概要報告」　考古史料部会

第５号　講演録「源頼朝一族と伊豆」　山本幸司
「明治・大正期静岡県会の漁業税争点と増税反対運動」　佐々木哲也
「大室山をめぐる民俗」　民俗部会

第６号　講演録「海と職人の歴史」　神野善治
「近世伊豆における海村の歴史」　泉　雅博
「沢田林・沢田についての考察」　佐藤陸郎
「『三団体事件』を考える」　渡辺秀夫

第７号　講演録「江戸時代の伊東―伊東湊が結びつけるもの―」　田上　繁
「伊東市朝日山経塚の基礎的研究」　時枝　務
「戦国期仁杉氏の動向」　盛本昌広
「旅人・温泉・村・身分―近世伊東の村落社会―(上)」　関口博巨

第８号　講演録「明治・大正期の伊東―市民が綴った地誌を読み解く―」　羽賀祥二
「旅人・温泉・村・身分(下)」　関口博巨
「近代伊東のかつお節考―伊東水産製造業の史料的検討―」　佐々木哲也
「吉田砲台の実測調査」　金子浩之

第９号　講演録「伊東・宇佐美氏の歴史と戦国時代の伊東」　盛本昌広
「近代の伊東における大火と地域の対応」　矢島有希彦
「『別荘地伊東』と若槻礼次郎」　小宮一夫
「海軍通信学校及び電測学校宇佐美演習所防空壕の発掘調査」　金子浩之

●伊東市所在文書目録　各500円（※4-2集のみ700円）

第１集　『荻野文書・高半文書・赤澤文書・八幡野文書』
第２集　『絵図・土屋文書』
第３集　『山川文書・肥田文書・蓮着寺文書・田畑文書・小川文書・前島文書・川村文書・遠州屋文書他』
第４-１集　『玖須美区有文書１』
第４-２集　『玖須美区有文書２』

●伊東市史叢書　各1,000円（※1, 2, 4集は品切れ）

第１集　『伊東の歴史と民俗寸描―地元新聞紙上にみる伊東の姿―』
第２集　『伊東における狩野川台風の記録』
第３集　『伊東温泉のうつりかわり―江戸時代から現代までの資料―』
第４集　『伊東の文化財』
第５集　『伊東の学校の歴史』

お申し込み・問い合わせ

※伊東市史編さん事業刊行図書は、伊東市内各書店及び伊東市役所５階の教育委員会生涯学習課窓口にて実費頒布しています。
市外からの申し込みは、電話0557-36-2182（伊東市史編さん担当）へお願いします。